

詩集

浮かぶ箱

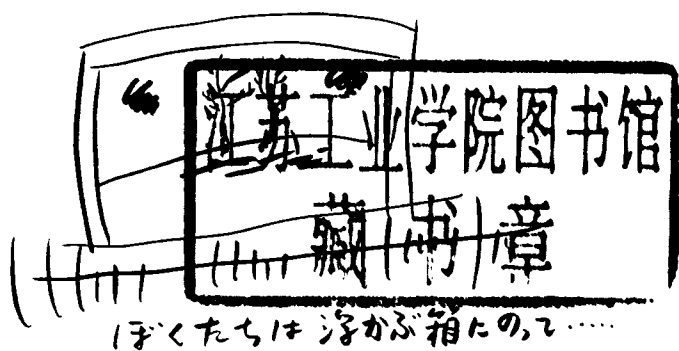
宇佐美孝二

詩集

浮かぶ箱

宇佐美孝二

人間★社





人間★社

詩集 浮かぶ箱 定価：本体二〇〇〇円十税

発行日 一九九七年十二月十五日 第一刷発行

著者 宇佐美孝二 ©KOUJI USAMI

発行者 高橋正義

発行所 株式会社人間社

名古屋市中区栄一・二・六名宝会館四階 〒四六〇・〇〇〇八

電話〇五二・二二・四五九一 FAX〇五二・二二・四五八七

振替〇〇八二〇・四・一五五四五

〔東京事務所〕

東京都文京区小石川一・四・八、七〇二 〒一一一・〇〇〇二

電話〇三・五六八四・一三九一 FAX〇三・五六八四・一三九二

装幀 奥村秀樹

印刷 株式会社荒川印刷

製本 株式会社ヤスダ

※乱丁・落丁はお取替えいたします。

ISBN4-931388-05-1

詩集 浮かぶ箱 * 目次 *

I

広場の孤独 8

高層 12

ガール 16

少年・疾走 22

明け方、ユメのなかにすばらしい夕立が 26

気の遠くなるような時間を量るとき 30

ひだり眼のうさぎ 34

II

浮かぶ箱 40

水のなかの逆さの樹 44

トワイライト4月 48

青の生活 52

霧のなかの足音 56

虫の日々 60

III

創世 64

発光体 68

ぼくを映す家 72

森の絵本 76

牡蠣 80

月が割れる 86

雨、ぼくの眼 90

おん・ざ・ひる II 94

旗 98

ぼくのなかのワンダーランド 102

扉 106

あとがき 110

詩集

浮かぶ箱

I

広場の孤独

地下街を通ると

ひとが交差するその場所では

影が 置きざりにされたまま渦まいている

こんど来るときはどのあたりを通ろうか

あの孤独にすれちがうことができるように

かすかな温もりにも触れますように

*

その夜、送別会があつて

宝くじのはなしで盛り上がった

「あらゆることに

当たらないで生きていることの好運があるよ」
とだれかが言つた

「当たる好運より

当たらない好運がさ、たしかにあるね
ほくたちの人生には」

そんなふうに満足してわかれたのだった
月の満ちてきている夜に

その月の

まだ見えてこない円みを

立ち止まり ビルとビルのあいだから

眼でたどった

満ちないでいることの好運を

まだ途上の影の

あったかいふくらみを

「これからだね」

と暁の空気のような声でだれかが言った

高層

じつは、

殺したいヤツがいるのさ。

夢のなかで首を締め

半死半生のソイツをケツとばして外にでた。

ここ、

十四階、現実では

高層住宅のベランダでおおきく息をする

昨夜夢のなかで殺したヤツは生きている、たぶん

もちろんオレも生きていて

スーパ―に入っていく人間を見下ろしているちいさな日暮れ。

風がでてきた。

とおくの団地の窓々

ひとつひとつのあかりが違う色をしている

色のついたセロファンの窓みたい

まかれたネジがゆるんで

食卓に座っているのは蠟人形のひとびともね

じつと見ていると

色が

じわつとにじんできやがった。

きょうは半月

ずいぶん高くまでのぼったね
首を、ねじってみると
とおく窓のむこうで、ほれ
おんなじような顔をして
こつちを見ているヤツがいる

おい。

このやろう。